森川杜園とその芸術

（講演資料）　二〇二一・一〇・三一　於　奈良県立美術館

淺井　允晶

森川杜園・略年譜

（和　暦）	（西　暦）	（関　連　事　項）
文政三年	一八二〇	喜右衛門の長男として出生。生地は奈良の井上町、元興寺町、あるいは添上郡横田の諸説あり。幼名は友吉。
天保三年	一八三二	この頃から内藤其淵に絵を学ぶ。
天保六年	一八三五	奈良奉行梶野土佐守良材より絵の御用を命ぜられる。
天保七年	一八三六	奈良奉行梶野土佐守良材より扶疏（ともしげ）の名と杜園（かつらその）の号を与えられる。その時の書付には次のようにある。 校画工友吉名字幷号　扶疏　訓登毛志計 杜園　訓加都羅曽能 神代記曰井上有一杜樹枝葉扶疏採字於斯文、是因其宅地之称呼曰、井上者蓋所以祝其功業之繁盛也 天保七年五月既望　聽濤館主
天保八年	一八三七	この頃穂井田忠友の書生となり、忠友を訪ねてきた柴田是真から奈良人形制作への道を勧められる。また、この頃から奈良高畑の大蔵流狂言師・山本浅右衛門に狂言を習う。 この頃から絵画・狂言を本格的職分とする。また、奈良人形制作（彫芸）への道を志す。
天保一一年	一八四〇	奈良人形制作（彫芸）を本格的職分となす。
天保一三年	一八四二	狂言師・山田弥兵衛を称す。
嘉永二年	一八四九	この頃、奈良人形師としての名声あがる。また、この年奈良奉行所与力橋本権兵衛政方（陶々斎）から、還暦祝いの贈り物に用いる「高砂置物」①の人形制作を依頼される。嘉永四年までに三八体を制作する。
嘉永三年	一八五〇	家業を弟に譲り、中新屋（町）に移住する。この年、転宅の祝いとして一乗院尊応親王より「杜園」の御染筆を給わる。また、この年から「三職」（奈良人形・絵画・狂言）を標榜、屋号に「尚古亭」を用いるようになる。
嘉永五年	一八五二	東大寺龍松院のもとめで「蘭陵王置物」②と「納曽利置物」を制作する。
安政三年	一八五六	春日有職奈良人形師を称す。
安政四年	一八五七	この頃、春日若宮大宿所絵師となる。
安政六年	一八五九	この頃、狂言師としての名声あがる。

文久二年　一八六二　杜園宅の舞台開き。

元治元年　一八六四　屋号を「尚古亭」から「鹿の屋」に変える。

慶応二年　一八六六　春日若宮神前に「生玉伏白鹿像」③を奉納する。以後、春日「白鹿像」④一百の制作を発願。また、聖上に献納する舞楽人形「納曽利置物」を調進、献上する。

［「生玉伏白鹿像」胎内墨書］
慶応二丙寅年十一月一日　春日有職奈良人形師
奉納　杜園扶疏勤刻
万代も神の御まへにうこきなき　こゝろをこめてつくりける哉

慶応三年　一八六七　狂言「釣狐」を演じる（都合四度目）。

明治二年　一八六九　狂言「釣狐」を演じる（都合五度目）。

明治五年　一八七二　正倉院や社寺の宝物検査で正倉院宝物などの「古物写し」（模写）に従事する。また、この頃奈良県御用にて古墳などの図面作成に従事する。

明治六年　一八七三　狂言「釣狐」を演じる（都合七度目）。東大寺龍松院の依頼で正倉院宝物「蘭奢待」⑤を原寸にて模造、東大寺真言院開催の展覧会で披露される。

明治七年　一八七四　狂言「釣狐」を演じる（都合八度目）。

明治八年　一八七五　奈良博覧会社依頼で正倉院宝物などの模造事業⑥に従事。また宝物調査に参加、模写を重ねる。

明治一〇年　一八七七　第一回内国勧業博覧会に「蘭陵王」などを出品、「鳳紋賞」を受ける。宮内省の命により「武内宿禰像」の制作を命ぜらる（明治二二年説あり）。この年から翌年にかけて「東大寺南大門狛犬」⑦一対の模造を制作。

明治一一年　一八七八　「岡田春女像」を制作。⑧

明治一二年　一八七九

明治一四年　一八八一　第二回内国勧業博覧会に「龍燈鬼」の模作を出品、妙技二等賞を受ける。上京、石川光明や柴田是真と会う。

明治一六年　一八八三　興福寺の「天燈鬼」・「龍燈鬼」⑨法隆寺の「塔本塑像」、元興寺極楽坊の「聖徳太子二歳像」などの模造を制作する。

明治一七年　一八八四　『大和名勝豪商案内記』に「古物模造専一」⑩とする杜園の店頭の図が掲載される。

明治一八年　一八八五　第一〇次奈良博覧会に「大立鹿」⑪（大鹿置物）を出品、一等賞を受ける。

明治二〇年　一八八七　大和郡山柳澤家の依頼で「融」⑫を制作。

明治二二年　一八八九　正倉院宝物「墨絵弾弓」の模造や、正倉院宝物「粉地彩絵倚几」に倣った模作を制作する。「福の神」(13)を制作する。
杜園の古稀を祝う狂言会の番組で自ら枕物狂を演じ、記念の扇面(14)を配る。

［画賛］
予ことし七十の齢をむかへしかしこさを門人中よりことほきて、狂言大会を催せとすすめをうけて、釣狐花子てうを門人にひらかせ、予ハ枕物狂てふを仕ふまつるとて
人々のあさけりこともかへり見す老のまくらにもの狂ひせり

明治二三年　一八九〇　第三回内国勧業博覧会に「笑仮面」・「腫仮面」を出品、妙技三等賞を受ける。

明治二五年　一八九二　養嗣子、森川杏園、歿。この年、翌年のシカゴ万国博覧会に出品する牝牡の鹿(15)の鋳造三対を奈良油留木町の百済與兵衛に依頼、その一対を宮中に献上する。また、帝国博物館の模造事業の一環として、法隆寺の「観音菩薩立像（九面観音立像）」(16)の模造を制作。

明治二六年　一八九三　米国シカゴのコロンブス記念万国博覧会に「牝牡の鹿」を出品。

明治二七年　一八九四　杜園、病没（七月十五日）。奈良の普光院（現、北川端町）に葬られる。

［辞世の句］
罷出て　あらぬ手業を世に残し　さもはつかしと　身ハ隠れつる

【参　考】

① 伴林光平の詠
奈良人形師杜園のもとへ申し遣しける
古里の手ぶりを残す人形に神代のかたはつくりそへぬか

②森川杜園の「物品製造法」（明治一〇年、抄録）
〈素　質〉檜、但し彩色モノ下地ノ儘ノ分ハ各種ヲ用フ
〈製造用品〉膠糊、代赫石、朱、群青、藍緑，青、唯黄、黄土、綿，燕（臙）脂、金銀箔粉、
※功用刀数寡少ニシテ風致古雅ヲ愛ス、